

## 長浜市「挑戦と創造」の懇話会 議事要点録

I 日 時 平成30年3月2日（金曜日）13時00分～15時00分

II 場 所 長浜市役所3階 3-B会議室（長浜市八幡東町632番地）

III 出席者 石井良一委員（座長） 松島三兒委員（副座長） 高津融男委員  
村山ジェラルディン委員 妹尾康裕委員 宮本麻里委員  
吉井大祐委員 箕浦淳委員 吉田真理子委員  
前川加奈子委員 藤谷法子委員 松井善典委員  
【長 浜 市】藤井勇治市長  
【事 務 局】北川総合政策部長、米田総合政策部次長兼総合政策課長  
野村課長代理、服部主幹、小川主査、富永主査

### IV 内 容

#### 1 開 会

事 務 局 開会を宣言

#### 2 市長あいさつ

- 市 長
- ・平素は、市政各般にわたり格別のご支援、ご協力をいただき、お礼申しあげる。
  - ・今年は豪雪であり、北部地域は特に降雪量が多く、滋賀県最北端である長浜市余呉町中河内では、まだ残雪が2mほどあるのではないかと。大雪であったが、おかげさまで大きな事故も無く乗り切ることができた。今、春の足音が聞こえてきているが、湖北にとって、春は非常に待ち遠しいものであり、陽気な春を迎えてしっかりと長浜市政の新しいスタートをきっていきたい。
  - ・この懇話会は、今年度からスタートした「長浜市総合計画」の推進と第2期基本計画の策定に向け、様々な分野でご活躍の皆様からご意見、市民目線の声をいただくことを目的として、新たに設けさせていただいた。
  - ・委員各位には、委員への就任をお願いいたしたところ、ご快諾いただいたことにお礼申しあげ、ご協力をよろしくお願いしたい。
  - ・日本人選手の活躍で大いに盛り上がった「ピョンチャン オリンピック」は記憶に新しいところであるが、2年後の2020年には、2回目の東京オリンピックの開催を迎える。
  - ・私たちの世代にとっては、東京オリンピックといえば、1964年であ

る。当時は、戦後からの復興をシンボルとして、高度経済成長の真っ最中であり、「物の豊かさ」がイコール「社会の豊かさ」という価値観の時代であった。

- ・オリンピック同様、一つの目標に向かって、国を挙げて一直線に走って行く時代であり、「人口も増える」、「経済も伸びる」というすべてが右肩上がりで、成長を肌で感じられる、「豊かさの意味」や「価値観」が皆同じという時代であった。
- ・時代はめぐって、2度目の東京オリンピックを目前に控えた現在は、「成熟社会」といわれ、当時と比べると一新している。世相も当然のことながら、大きく様変わりした。
- ・今後ますます顕著に進んでいく「人口減少」に対応すべく、様々な対応策があるが、一つはコンパクトシティといわれる縮小型の社会への転換を意識する必要がある。また、技術革新や価値観の多様化が進み、前例踏襲型で一つの方向に向かっていけば、課題が解決できるという社会ではなくなった。
- ・このような社会状況の中で、これからの長浜市について考える時、今まで市民の皆さんと共に創り上げてきたものをいかに有効に活用していけるかが、大きな鍵となってくる。
- ・私は、先日の市長選挙で、市民の皆さんの信任を得て、3期目を努めさせていただくことになった。
- ・2期8年間で新長浜市の新しい「種」をまき、水をやり肥料や太陽の光を与え、「花」を咲かせてきた。今度は、新たな「創造」という「果実」を実現させたい。そのために、どんなことにも「挑戦」していく。
- ・このような思いをこめて、この懇話会の名前にも「挑戦と創造」を掲げた。私自身も決意新たに市政を担って、全力投球していきたいのでご指導よろしくお願ひしたい。
- ・時代の大きな分岐点である今、未来の長浜市はどうあるべきかをイメージしながら、皆様の貴重なご経験なども踏まえ、自由闊達に風通しよく議論いただくことを願ひ、挨拶とさせていただきます。

### 3 委員紹介

事務局 各委員および事務局から自己紹介

### 4 懇話会の役割について

事務局 資料2に基づき説明

## 5 正副座長選出

事務局 座長及び副座長は、委員間の互選により選任することを説明  
→座長に石井委員、副座長に松島委員が選任された。

座長 【座長挨拶】

- ・総合戦略や定住自立圏の共生ビジョンや総合計画などの各種計画の委員を務めてきた経緯もあり、推薦いただいたものと思っている。
- ・役所は計画を作るときにはどうしようかと盛り上がるが、計画を作ったあとはそれに安住してしまうのが常であると思う。よって、懇話会を通じて、計画ができた後の進捗を見ていく、また自治体を取り巻く環境は刻々と変化していくので、どういう対応をしていくのかということなどをこの会で意見交換できればと思っている。
- ・「前例踏襲」でなく、これからは「挑戦」の姿勢で新しいことを考えないといけない、との市長の言葉であったが、「創造のための挑戦」について、長浜市としてこれから何をやっていくかということが無いと、都市間競争にも負けてしまうし、長浜市自体も衰退していく。
- ・長浜市には曳山まつりなどすばらしい文化があるが、このような文化も存続の危機にある。長浜市をこれからどうするのか、みんなで知恵を絞っていければと思う。
- ・また、この会は懇話会であり、委員会でも審議会でもないので、自由に議論し、普段の生活の中で考えていること、この際言ってみたいことなど意見を出していただきたい。

## 6 議事

### (1) 会議の公開等について

事務局 参考資料2に基づき会議の公開について説明。  
→異議なく公開として決定された。

### (2) 長浜市総合計画等について

事務局 参考資料3、参考資料4、参考資料5、参考資料6により、長浜市定住自立圏構想、長浜市まち・ひと・しごと創生総合戦略、長浜市総合計画について説明

委員 ・第2期基本計画は計画期間が平成31年度からの4年となっているが、本懇話会の開催要領では、開催期間が平成32年3月31日までとなっている。期間にずれがあるが、このあたりの考えを伺いたい。

事務局 ・懇話会委員の任期としては、皆様も仕事の事情等あると思うので、その際柔軟に対応できるように2年と区切りを設けているが、2年後の再任を妨げるものではない。

(2) 長浜市の人口動態等について

事務局 資料3に基づき、長浜市の人口動態について説明

座長

- ・意見交換の前に、参考資料4がわかりやすく長浜市の人口の現状がまとめられているので、改めて確認する。
- ・長浜市の人口動向は2つの特徴がある。長浜市が定めた人口ビジョンは2～3年前のものだが、その際の分析に対し、更に減少傾向は加速している状態である。
- ・一つは若年女性、20～30歳代の女性の転出が多い傾向になっている。少し前までは若い男性の転出が多かったが、女性は比較的留まっている、もしくは一旦出てもまた戻ってきていた。それが今は転出が加速している状態である。
- ・2点目は長浜から首都圏へ転出するのではなく、彦根や草津・守山、京阪神へ多く転出している。
- ・このような人口移動の特徴がある中で、今12万人弱の人口を、予測で行くと2060年には8万5千人になるところを、なんとか10万人という都市規模を維持しようとしている。
- ・そのための対策として総合戦略の中で、産業振興、観光・移住定住、子育て施策、都市再開発などの目標を定めた。今この計画を作って3年になり、来年度も様々な施策を行っていくが、なかなか解決に至らないことについて市当局も危機感をお持ちである。
- ・普段暮らしている中でも人口が減少しているということを実感されていると思うが、魅力ある長浜市を維持していくにはどうすべきか、また、今身の回りで何が起きているかなどを自由に話していただきたい。

委員

- ・バイオインキュベーションセンターでは、創業支援事業計画に基づき、平成26年から創業支援の活動を行っており、現在、相談件数は延べ800件を超え、長浜市内で新たな起業は50件を超えた。
- ・長浜市内で起業したいと思っておられる潜在的な方がおられると感じており、「小商い」という形でも起業をされる方が増えてくることは、地域に人が残る一つの方法ではないか。地域に起業される方が増え、一部でも地域を支える中堅企業に成長するところが出てくれば、雇用が増えてくる。よって、小さな芽を大事にする取組は必要と思う。その部分を支える行政からの支援体制も必要かと思う。

座長

- ・「バイオインキュベーションセンター」と言えば、「小商い」というより専門的なイメージがするが、50件の起業はどういうところか、また、「小商い」のイメージはどういうものか。

委員

- ・おっしゃるとおり、平成18年度当初は、バイオ産業の専門的で高度な分野で、資金的に余裕があるような企業の研究開発の支援を対象に

していた。

- 委員  
・「小商い」は、大きな店舗で地元の雇用創出につなげるという形ではなく、地元の商店街などの空き店舗などで自分の生計維持のための商売をしていくイメージである。
- 委員  
・私もバイオインキュベーションセンターの起業支援にお世話になった。長浜市は創業塾があるなど、起業支援が手厚い印象がある。
- 委員  
・最近では女性の起業という形で、小商いより更に小さな形を望む方にLOC0に来て勉強していただいている。
- 委員  
・LOC0にこられる方は、講師業の方、作家の方などで、子育てと仕事を両立させたい方や、好きなことを仕事とするための起業とパートタイム勤務のダブルワークの方が多い。
- 委員  
・LOC0にこられる育児中の女性の話を見ると、働く場所を見つけることが大変、どうしていいか判らないとのことである。どこの企業も人が足りないとのことであるのに、実際に働きたいと思う人と上手く繋がっていない感がある。働きたいと思う人と企業を上手くつなげていきたいと思っている。
- 座長  
・ハローワークにいけば、毎日のように求人が出ている。それではまかなえないものか。
- 委員  
・小さな子供をつれてハローワークに行くということはなかなか難しい。また、ハローワークには、短時間勤務のものは、あまり出てこない。その部分をLOC0で上手く繋いでいければと思っている。
- 委員  
・私の診療所では、子育て中の女性が6、7人ほどいるが、当初の勤務条件と異なる形で働いてもらっている。まずは週一で来てもらうことから始めて、その後、相談して働き方を決めて、というようなやり方をしている。そうすると、多様な働き方のニーズがあるので、自然と「働き方革命」が起こる。
- 委員  
・もしかしたら、働き方のミスマッチが生まれている現状は、一人ひとりにあった働き方について相談できる場所や仕組みが長浜市にはまだ無いということかもしれない。
- 座長  
・確かにハローワークで掲示されている求人は、長い時間働いてくれとか、託児所は自分で探してくれとかという条件での募集が大半だと思う。自分の好きな仕事を好きな時に、インターネットなどを使いながら働くということは、新しい働き方のスタイルだと思う。
- 委員  
・そもそも、長浜市は子育てしやすいのだろうか。
- 委員  
・長浜市は子育てしやすいと思う。他県の状況を聞くと、長浜市は上位に来るくらいの子育てのしやすさだと思う。小さなことでもきめ細かなサービスが行き届いている。
- 委員  
・給食費の無料化も他県ではあまり無いし、人口の割に保育園の数も多

- い。都市部では妊娠がわかった時点で保育園を探しても、とても見つからない状態であると聞いた。
- 座長
- ・他の市町で聞いたが、地域の周りに産婦人科が無くなった、小児科が無くなった、このようなことを聞く。今の長浜市では問題が無いか。
- 委員
- ・これは長浜市でも厳しい状況だと思う。個人の産婦人科や総合病院の今後を見据えると、満足できる状態ではない。
- 座長
- ・医師不足をどうするのかということは難しい話である。産婦人科にしても、産む女性の数が減れば、ニーズがなくなり、ビジネスとしては成り立たなくなる。
  - ・長浜市は子育てがしやすい状況であると言うのに、なぜ若い女性は外へ転出してしまうのだろうか。
- 副座長
- ・子育てがしやすいと言うのは、子供を産んでも仕事がしやすいということも含めてか。
- 委員
- ・子育てに対する市の経済的なサポートや、保育園への入りやすさなどの面から子育てがしやすいということであるが、仕事となると、若い人にとって魅力的な働き口が少ないので、若い女性が長浜市内に定住するということは少し厳しいかもしれない。
  - ・今の若い人は長浜市外に向かっていきたいという思いが強いのではないか。
- 座長
- ・今の世の中はインターネットで情報が全て手に入る。例えば、京阪神等の都市部へも電車ですぐに行くことができる。長浜市にいても事足りる中で、長浜市の外に憧れをもち、出て行ってしまうということがよくわからない。
- 委員
- ・そのとおりだと思うが、その思いは、今の年齢になって感じたことであり、18歳、19歳の若者が頻繁に新幹線を使って京阪神に向かうという考えを理解してもらうのは難しいと思う。
  - ・目に見える長浜市の楽しさ、例えば「こんな楽しい仕事が長浜にはある」と言うことが無ければ、長浜には留まらないかと思う。若い人には若い人の事情があるので、もっと目の前にワクワクドキドキすることを作らないといけない。
- 座長
- ・人口ビジョンのグラフを見ると、2000年から2005年にかけての人口移動を見ると、20歳から24歳の年齢層は増えている。一度大学進学で市外に出たが、就職を機に戻ってきたことが考えられる。また、35歳から39歳の年齢層でも同様に人口が増えていた。しかし、2010年にかけては、どの年齢層でも減少している。
  - ・また、30代の女性が少ないということは、子どもを産める層が少ないということであり、必然的に出生数が低くなる。
  - ・長浜市の課題は、市外へ出てしまうことを抑えることも一つだが、市

外から長浜市の魅力を感じてもらって、長浜市に住んでもらうこと、もしくは長浜市から外に出た人に戻ってきてもらうことではないか。しかし、魅力的な仕事が今の長浜市には少ないので、「ワクワクドキドキ」できる仕事のひとつとして、商店街の一角などで子育てしながら起業できる仕組みなどを作る必要がある。

委員

- ・私はサンサンランドや幼稚園で月数回、子ども達に英語を教えているが、多くの母親が仕事に行こうとしているので、幼稚園ではなく保育園に預けるケースが増えている。
- ・子供の未来にとって、2歳、3歳は非常に大事な時期である。長浜市で、幼児を対象としたインターナショナルスクールが行なわれれば良いのではないかと。長浜市は、外国人が多いが、仕事が無ければ市外へ出てしまう。外国人が長浜で仕事を持っていけるようにするべき。
- ・英語ができる日本人、外国人たちで、子ども達に英語などを温かく教え、多文化共生についても理解してもらえ、共に支えていく仕組みを作っていくことも必要だと思う。

委員

- ・長浜市に住んで15～16年目になるが、長浜市の魅力の一つとして、歴史ある建物や古民家がそのまま維持されていることがある。今では新たに建てる建築物を歴史的建築物のように見せて集客しているところもあるが、長浜市には本物の歴史的な建物がある。このような建物をビジネスに結び付けることができないものかと考える。まだまだチャンスはあるように感じる。

委員

- ・長浜市には、田舎の雰囲気がいいところ、歴史由緒あるところといった長浜らしいところが数多くある。そのような長浜らしさが伝わるようなまちになるといいなと思っている。

委員

- ・日本中で今後継者がいなくて廃業するという会社は数多くあると思うが、長浜市でもこの先、増えてくると思う。創業したいという思いがある人と、ノウハウがあるが後継者がいない会社とが上手くマッチングすることができれば、地方創生も進んでいくのではないかと。日本商工会議所も力を入れている部分であり、国の補助もあるということなので、行政も、このようなマッチングが進むような仕組みを作り上げてもらえればと思う。

委員

- ・先ほど、待機児童の話が出ていたが、確かに東京などの都市部に比べ保育園には入りやすいと思っているが、平成27年は、兵庫県の西宮市に次いで待機児童は近畿で9番目の多さで、大津や草津などに比べても多かったと記憶している。
- ・待機児童という国の定義に当てはめると非常に人数は少なくなるが、実際に保育園などに申請を出しているが入れないという方はその6～7倍はいると思う。

- ・特に最近では乳児の待機児童が多い傾向にある。長浜市はまだ、3歳になるまでは自分で育てたいという母親が多いが、国の3歳児までの保育料無償化等の施策が展開すると、0歳児から保育園に預けられる方が増え、3歳になってからなど、途中から保育園に預けることは難しくなるのではないか。
  - ・特に中心市街地近辺の数箇所の保育園では、この傾向が顕著で、中心市街地で「小商い」をしようと出てこられる人たちにとっては、保育園に入りにくい状態といえるのではないか。
  - ・一方で、長浜市の保育料は第2子半額、第3子無償化に魅力を感じ、彦根市や米原市から長浜市に引っ越してきて、当園に入園された方がおられることも事実である。家計にとって支出が減るということは大きい。この施策は、ぜひ継続していくべきと思う。
- 委員
- ・総合計画の「めざすまちの姿」がプロセスを大事にした表現となっているとのことであったが、到達目標を掲げながら、そこに着地できたら評価するというのではなく、プロセス、過程を重視しているという考えはいいと思う。
  - ・チャレンジということは、失敗を許容できる文化を育成していこうということであると思っているので、失敗したときの、再チャレンジを活性化できる仕組みを作り上げることも必要かと思う。
  - ・クリエイションの面については、もともと1970年代に長浜市は「博物館都市構想」を掲げて取り組んできており、その原点に立ち返るのかなと感じた。様々な取組について、美しさを大事にしながら進めていくことがまちの魅力に繋がっていくのではないか。
  - ・長浜市の施策は医療や子育ての面では非常に評価は高いと思う。あとは、県南部に高校生等が流出しているので、高校、中学の教育に重点を置き、魅力ある教育を進めることで、長浜市に引っ越してくる人も増えるのではないか。
- 副座長
- ・学生の就職先という視点では、学生が地域活動をとおして長浜で働きたいと思っても、実際に長浜市には働ける場所が少ない。そうすると、県内で働く場所を探し、県南部の企業に就職することとなる。このような点では、若い世代の思いを吸収しきれていない。この点が雇用のミスマッチに繋がってくるのだと思う。
  - ・長浜のイメージは非常に歴史が深いまちで、イベントというと歴史関係が多く、また外からこられた方には古くからの街並みなどに関心を持たれる。このように、過去を感じることはできても、今の長浜の暮らしぶりなどを感じる部分が見えてこないように思える。過去の歴史が今、未来に繋がっていけるという部分をうまく作り出すことができればと思う。今暮らしている人たちが見える長浜を外に伝えていくま

- ちづくりが重要である。
- 委員
- ・私は生まれてからずっと今の長浜市を出たことがない。高校卒業後、4年制の大学に進学したが、大学卒業後、なかなか長浜には就職できるようなところはなかった。逆に高校卒業したあとすぐに就職した人は、地元の会社で勤めていた。
  - ・結婚後も、両親が近くにいるところに住んでいたため、子どもも保育園という形ではなく、両親に面倒を見てもらう形であったため、保育園に預けずに幼稚園に行っていた。
  - ・今は、同じ市内でも両親と離れた場所に家を建てる人が多く、核家族化しているため、子どもを両親に預けるということもできず、保育園に預けることができなければ働くことができないという家庭が増えている。結果的に、2人目、3人目の子どもが生まれると、正規職員で働き続けることはできないという人が増えているのが現状である。
  - ・働きたい人と会社のマッチングという話が先ほどあったが、ハローワークに3ヶ月間求人を出しても、誰も応募がなかった。実際にはパート程度でも来てもらえる人がいればと思っけていても、ハローワークには、フルタイムの勤務条件で提出しており、このあたりに原因があったのではないかと思っている。
  - ・今は、短時間でも働ければ働きたいという女性などのニーズがあり、子どもを幼稚園に預けている間だけでも来て欲しいという企業側のニーズもある。これらをうまく繋ぎ合わせる機関があればと思う。
- 座長 議論は尽きないが、本日はここでいったん終了とし、次回以降の議論につなげることにしたい。

## 7 今後のスケジュール等について

事務局 資料4に基づき説明

## 8 閉会

事務局 総合政策部長よりあいさつ

以上